

天に国籍を持つ者

「鳥の將に死なんとするやその鳴くや哀し、人の將に死なんとするや、その言や善し」という論語の言葉があります。人の死に際の言葉は、まともですぐれている。人生の厳粛な最期の言葉には真情がこもっている、という意味の言葉ですが、獄中から手紙を書き綴ってきたパウロにも、その覚悟が見て取れますし、今日の箇所には、この手紙でいちばん有名な言葉が記されています。

先週、先々週と、自分自身の秘密にふれたとも言える 3 章の山場を説き明かしました。それはイエス・キリストの復活の姿にあやかりたいと懸命に生き抜く姿、自分自身も完全な者になったとか、捕らえ得たというのではなく、彼自身も、求道者のように体を前に傾けるようにして、人生の競技場を一心にキリストめがけて駆けてゆく。かけ急いでゆく、そんな姿を愛するフィリピの信徒たちにあらわにしました。この辺りは読んでおりますと、筆の運びからパウロ自身の息遣いが感じられるような気がします。ここまで突き動かされるようにしてみずからの内に秘めた願いを、確信を皆の前に打ち明けたのですが、ここでいったん筆をとめ、ちょっと息を入れて、兄弟たち、と今度は信徒たちに呼びかけて、いまの話にみんなついてこれたかな、置いてきてしまっていないかな、と念を押すような勧めが続くのが今日読みましたところです。17 節「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。またあなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。」とこれまでを振り返っておさらいをします。少し乱暴なまとめ方を手紙も終わり部分にさしかかってきましたからしてしまいますが、パウロは 2 章に有名なキリスト賛歌を紹介しながら、

わたしたちのために神の座を捨てて人となり、十字架の死に至るまで従順であったキリスト・イエスの姿を指し示しました。これがすべての人のお手本です。へりくだること、自分を無にして仕えること、このキリストの苦しみに与ることを願って、パウロもそれに倣って走り、いま福音のために牢に入れられている。しかし、それが何だ、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに比べたら何ほどのこともない、とパウロは語ってきました。そしてあなたがたの知っているテモテもわたしと同様にキリストに倣って歩む練達の人物であることを知っているでしょう。また、あなたがたがわたしを慰めるために、世話をするために贈り物をたずさえて遣わしたエパフロディトも福音のゆえにこのように行動し、病を得て死ぬほどの目にあつた。このエパフロディトも、キリストが仕えたように従順に福音に仕えた尊い働きをしたのだから、どうか彼のような人を敬い、途中で使命を放り出したというような扱いをせず受け入れなさい。そう勧めてきました。キリストにパウロが従い、パウロにテモテが従い、そのパウロにフィリピの人々を代表してエパフロディトが仕え、従つた。このようにわたしたちのために僕となって下さったキリストの愛に触れたがゆえに、生き方の向きを変えられた者たちが次々とレースに加わることによって短距離走ではなく、長距離走に、個人競技ではなくて、リレーのような集団競技になってゆく。点が線になり、面になる。キリストを主として従う群れが形作られてゆく。そのようにして彼らが目指すところが傍目にもはっきりと、その生き方、人生の課題の担い方によって明らかにされてゆくこと、つまり、パウロ自身が復活の主に出会って、その生き方を変えられたように、主イエス・キリストと出会い、人格と人生と共同体を新しく福音によって形作ってゆく者たちによって証が立

てられる。神の御心が地上において示される。それがパウロの願いでした。現実には、あの犬どもに注意しなさいと3章2節で警告したり、今日読みました箇所にも「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多い」状況があるのです。彼らはキリストを主として従い、仕えるのではなく、その腹を神として生きている、とパウロは痛烈な言い方をします。神さまもイエス様も除いて、自分の腹を満たすことを中心に世の中を生きている者があまりに多すぎる、というのがパウロの率直な感想だったのでしょう。自分ファーストで、比喩的に表現しますが、人を食いものにするのが当たり前の生き方といったらよいのでしょうか。そういう危険は誰しものが潜在的に持っているものです。すでにパウロは2章で「めいめい自分のことだけではなく、互いのことにも注意を払いなさい」とたしなめていました。フィリピの信徒たちも気を緩めればこの世のことしか考えない人々になってしまう。そうなればキリストの生き方とは向きが違ってしまいます。自分の腹を痛めるようなことは絶対にしない。つまり神さまのために献げるとか、他者のために施すとか、分かち合いやゆずりあいや学びあいに生きること自体を放棄してしまい、世に取り込まれる。そうした交わりに生きること放棄した「わが - まま」な人間の行き着く先は滅びであるとパウロは告げています。しかし、ここで転調があります。歌の調子が変わるのです。パウロにとっては悩みの種であり、悲しみの種であるような人々ではなく、わたしの喜びであり、愛している者たちを思い起こし、キリストに従って苦難の道を歩み、与えられた恵みを分かち合って歩んでいる者たちに対して、感謝をもって高らかに「わたしたちの本国は天にある」と宣言するのです。滅びのふちを覗き込むのではなく、天を指さす。神の民は天に国籍をもち、

天の市民としての振る舞いを期待されている。このようなビジョンを共有することはとても大事ですね。おそらくこの宣言の背景には当時の地中海世界ならではの政治的な状況があると思われれます。というのはフィリピはギリシアの町ですがローマ帝国の支配下に組み入れられています。そして、このローマの支配の仕方というのがローマ市民権の付与によって征服した地域の人々をローマ市民権が提供する恩恵の秩序、支配構造のなかに組み入れることだったからです。事実、パウロはユダヤ人ですがローマ市民権を持っていたために福音伝道の結果、町に混乱をもたらしたとして逮捕され、鞭打たれたことに対して、ローマ市民権を持っていることが明らかになった途端、謝罪がなされましたし、待遇が変わったという記述があります。ローマの軍事力、政治力を背景に、支配の秩序が市民権として地中海全体に張り巡らされている。このような地上の権威に対して、しかし、パウロは低きに降り、人々のために自分を無にして仕えるキリスト・イエスを指し示し、そこに力による支配ではなく、愛にもとづく謙遜と互いに仕え合うことによって生まれる新しいビジョンを指し示して生きてきたのです。力の権威、支配する権威を有する地上の国籍＝ローマ市民権ではなく、キリストのゆえにひとつとされた民からなる天に国籍を持つ分かち合いの共同体のビジョンを指し示した。「わたしたちの本国は天にあります」というこの聖句は、フィリピの信徒への手紙を代表する最も有名な聖句と言って良い。本国が天にあると言われた時、ローマ市民になることがこの世での勝ち組であり、さまざまな特権に与ることで当時の人々を虜にし、力を奮っていたシステムに対して、キリスト者は天に属する、と国籍を天に持つ者たちだと鮮やかに示したことは本当に見事です。地上の領域でしか物事が見えなくされているわたしたちに天の領域、神

さまのご支配される領域を示すことで、パウロは復活による死の恐怖からの解放までも含めて、ローマ市民権が提供するよりもはるかに広く、ながく、深く、遠大な、つまり永遠につながる本国を提示したのです。そこには神がおられ、キリストがそこからわたしたちを迎えに来てくださる。その時を待ちつつ、わたしたちは生きる。来てくださるキリストと身体を前に傾けるようにして人生という競技場を走ってゆくパウロ、お互いが、お互いを目指して進んでいる。そして 21 節「キリストは万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい身体を、ご自分の栄光ある身体と同じ身体に変えてくださる」と述べるのです。この 21 節は、10 節に述べたいかなる苦しみをも喜ぶことの出来るパウロの原動力「キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したい」という部分の説き明かしにもなっています。これこそがローマ市民権にまさる本国を天に持つ者に約束されている恵みであることをパウロは強調し、これを分かち合うことによって、地上におけるわたしたちの歩みが照らされ、苦しみや不条理といったこの世のなかに生きることどもすべてを、神の国の視点から見ることへと招くのです。この消息を分かち合い、確認しあい、喜びあうことこそがキリスト者の力の源です。4 章 1 節「だから、わたしが愛し、慕っている兄弟姉妹たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかり立ちなさい」。ここにパウロの心からの願いがあります。「人の将に死なんとするや、その言や善し」であります。

お祈りいたします。